

達人

ウチの道場には「達人」が居る。

三十五歳の僕は、数奇な縁で格闘技の道場の役員をする事になった。

ヨーロッパの名門ジムで修行を積んだ新進気鋭の大型ファイター、ノブハヤシ。僕は彼の試合を「逆輸入ファイター」と呼ばれた凱旋帰国の時からテレビでよく見ていた。外連味なく「前へ、前へ」と前進する彼のファイトスタイルには、胸を熱くさせる何かがあり、お気に入りの選手の一人だった。彼がいわゆる「マツチヨ」と呼ばれるような筋肉マンタイプの格闘家ではなく、ナチュラルな体軀だったのも良かった。僕の個人的な考え方だが、黄色人種である日本人に白人や黒人の筋肉の付き方を求めても仕方がないような気がするのだ。初見ではノブ選手は「恰好良さ」からは遠い選手だったが、実際に試合が始まると、その馬力溢れるファイトに魅了される。ノブ選手は「玄人好み」などという評価も受けていた。

ノブ選手が格闘業界で旋風を巻き起こしている頃、僕が懇意にしている方が、商用で度々オランダを訪れていた。その方は在蘭邦人の方々とネットワークを持ち、オランダの名門ジムで修行をしていたノブ選手とも付き合いを持つようになっていった。その方の音頭で「ノブハヤシ後援会」が組織された。その方は会長となり、僕も後援会に加わって色々なお手伝いをする事となった。会長は僕が今まで付き合ってきた方々の中で、トップクラスの「人間力」を持つ人物である。その器量の

大きさは、アントニオ猪木さんに近いものがあつた。

実際に会つたノブ ハヤシ選手は予想以上の好漢で、彼の努力や人柄を知れば知るほど、彼を応援して行きたいという気持ちは強くなつた。後援会は激励パーティーを行つたり、ノブ選手が出場する格闘技大会に大応援団を組織して応援を行った。応援には赤の幟を拵えて、それを振つてノブ選手を応援した。幟には「世界を獲れ！ 金剛神!! ノブ・ハヤシ」と記した。「逆輸入ファイター」と呼ばれることが多かつたノブ選手だが、僕にとつて彼のイメージは、その凄絶さを持つ試合中の精悍な表情と相まって、「金剛力士像」であつた。日本人にとつての強さを具現化した金剛神こそがノブ ハヤシだと思つた。後で聞いた話だが、池上本文門寺の金剛力士像（仁王像）はアントニオ猪木さんをモデルに制作されたという。

横浜アリーナで行われた大会の応援に参加した際、会長からある方を紹介された。

「あまちゃん、彼は僕の後輩で、空手の宗家で、八段の達人なんだよ」

達人に初めてお目に掛かつた。

格闘技に関しては、小中学生時代に剣道をやっていた事を除けば、一観客に過ぎなかつた僕にとつて、瘦身で、身長も普通の達人は、僕が勝手に妄想する奇異な風体の「達人像」とは違うものだつた。しかし、この後、達人と接するうちに、僕は自分の浅慮を恥じるようになる。その位、達人から語られる色々な話は僕の格闘技に対する考え方を根底から変革させた。どんな格闘技の専門書を

読むよりも、達人の話は面白く、そしてリアルで、時には緊張感を強いられるものだつた。この時に達人と出会えたことで、僕の格闘技に対する思考体系は初めて開眼したのかも知れない。

大阪出身の達人は、話し上手で、ユーモアに溢れていた。時にそのユーモアが暴走することもあるが、基本的には「笑い」が大好きな人だ。

ノブ選手が修業先であるオランダの名門ジムより「免許皆伝」を受け、日本でその名を冠しての道場を開くことが出来ることになつた。一九七二年にその道場が創設されて以来、そういった免許皆伝は初めての事であつた。この頃にはノブ選手を「弟」のように可愛がっていた会長は、あらゆる限りの力を動員し、ノブ選手の夢を実現させた。二〇〇四年、道場は完成した。僕は理事として道場に携わることとなつた。

現役選手でもあるノブ ハヤシの負担軽減と、道場の精神的支柱として、大阪から達人が招聘された。達人は自らの道場を師範代に任せて、快く上京して下さつた。

道場が始まり、僕が達人と接することも多くなつた。

ある日、まだ練習時間ではない道場を覗くと、達人が空手の「型」かたを行つていた。

その「凜」とした動き、静と動の美しさに、僕は我を忘れて見入つていた。

達人はこちらに気付き、

「なんや、あまちゃん、来とつたんかいな」

と声を掛けてくれた。

「見事ですな」

達人の『型』の美しさに嘆息した僕は、そう言うのが精一杯だった。

「いや、ちょっとあかんわ。ほら、型の最初の立ち位置と、終わりの立ち位置が、若干半歩ほどずれとる」

二十畳はある空手場を目一杯に動きながらの型で、達人はそんな事を大いに気にしていた。

「僕から見たら、ピタリと同じ場所に戻ってましたよ。凄いなあ、と思ったのに」

「あまちゃん、型つちゆうもんは、ちゃんとそういう風に出来とるんよ。何百年もの歴史があつて、一つひとつの動きにも、全部意味がある。今のは自分で納得がいくには、ちょっと遠かったなあ」

一つひとつの動きの意味など、詳しいことは僕にとって理解出来るべくもないが、達人の意識が僕などより数段上にある事だけは感じられた。

達人から、型について色々話を聞いた。型には全ての先人の経験や技術が込められていること、型を疎かにするようでは空手道は成り立たないことなど。

達人の流派は日本三大空手の一派で、古流空手と呼ばれるものだ。

今や空手の代名詞と呼ばれている大きな組織が、空手の歴史の中で言えば、新興空手である事もこの日、初めて知った。だからその流派には伝統的な型がない。

「伝統を馬鹿にする者は、伝統に復讐される」

これは武道家の言葉ではない。僕のデザインの先生の言葉だ。

業界最年少のアートディレクターとして活躍した僕の先生は、若さに任せて色々な仕事をされた際に、大きな失敗もしたそうだ。その中でも大阪万博のバピリオンをデザインした時には、リサーチ不足で、ある国の禁忌カラータブーカラーを用いてしまい、大使を怒らせてしまったという苦い経験をしている。その経験から僕たち生徒には「伝統を軽んじるな」と口を酸っぱくして説き続けていた。

達人の話を聞いていると、そんな事を思い出した。

鋭く真理を突く達人の言葉には、本音と建前という大人のロジックには反する部分もある。

「元々、日本の空手のルーツは沖繩。沖繩は本土や中国に度々占領される事があつて、現地では反乱を抑えるために『刀狩り』のような武器を取り上げる動きがあつたらしいわ。それでも農具などを改造して戦いよつた。鎖鎌なんかはその時に考案された農具改造の武器や。んで、とうとう農具も取り上げられてしまった。そして誕生したのが『空手』や。そやから、最初に空手があつて段々武器が発達していった訳じゃない。武器に代わつて、素手で人を殺すための技術が空手ちゆう訳や」

おそらく、この達人の説明は正鵠を射ている。だが、「武道は青少年の心身の健全育成」という建前がある以上、この真実は喧伝される事はない。達人もそんな事は充分承知だ。

「でもな、一つだけな、あまちゃん、覚悟しておかなきゃならん事があるで」

真剣な表情で達人が言った。

「何ですか？」

「武道とは、そういった、相手を壊す、究極を言えば『殺す』という部分も、一つの要素として持っている。これは事実や、『剣道』かて、ルーツはそうやろ？」

「うん、その通りですね」

「そやから、どんなに安全に注意しても、百パーセントの安心なんて事はない。事故は起こるかも知れへん」

「は？」

「あまちゃんも、道場に関わる以上、その『覚悟』だけは、今のうちにきっちり自分の中で整理を付けときや」

達人にそう言われるまで、僕の覚悟は足らなかった。冷水を浴びせられた気分だった。軽々しく「格闘技」に携わっていた自身を恥じた。

思えば館長を務めるノブハヤシ選手だって、本当の意味で、命懸けでリングに立っている。

あるショーの要素の強いプロレスを目にしたときにアントニオ猪木さんが、

「俺たちが命懸けで作ってきたプロレスをオモチャにしやがって！」

と激怒するのを、僕は真横で目撃したことがある。

そんな人たちの側に居ながら、全くを以て、僕自身の覚悟は決まっていなかった。

達人の言葉は、そんな僕の中途半端な気持ちを見透かし、導いてくれた。

それ以降、僕は選手のことをより一層考えられるようになった。

男である以上、誰もが戦いたい。

それは格闘技というリングの上だけでなく、仕事や生活の日常的な部分でも普遍的に存在する本能である。それがこの星に生を受けた全ての生物が辿ってきた歴史だ。

怒りがあるから、闘志があるから、人は成長するのだと思う。

その中でも格闘技を志す選手たちは、自らにストイックなまでの制約を課し、美しいまでの努力を続けている。

彼らがリング上で光るのは当然の話だ。

少しでも彼らのサポートが出来ることに、僕は今、喜びを感じている。

勝負論に関しても、達人の話は面白い。

「試合ちゆう形式は、ホンマの真剣勝負とはちやうわな」

「えー！ そんな事ないでしょ」

「まあ、今の世の中やったら仕方ないけどな。ほら、『試合』ちゆう言葉は『試し合い』から来とんやからな」

「あゝ、成る程」

「昔の武術家が『決闘』するつちゆうたら、それこそ、ちゃんとした書面をお互いに書いて、場所も山奥とか、人目に付かん所でやったもんや。観客なんて当然居らん。もし居ても、立会人が一人とか、そんなもんや。真剣勝負の決闘ちゆうもんはホンマに生死を懸けてやるもんや」

時代錯誤的な達人の言葉に、僕は、「この人は宮本武蔵とか、そんな風な時代の人ののだろうか」と、一方で呆れ、一方で大いに感嘆した。

僕にとって、達人の話を聞くことが、一つの楽しみとなってきた。

だが、若い練習生には達人の言葉は捉え所が無く、理解に苦しむような部分もあったようだ。

「なんでこれが理解出来へんかなあ」

と、達人がぼやく場面もあった。

中年の僕にとって、若い人たちは優遇されすぎているように思う。

手取り足取り教えられて当然、と考えている節がある。

僕らの若い頃には、武道に限ったことでなく、全ての技術が、「学ぶものではなく、自分自身で盗むものだ」という職人氣質の価値観の中にあった。

達人も、日本一強かったという伝説のある、師匠でもあった亡父の技術を盗み見て、自身で練習を重ね、強くなっていったという。

ノブ選手の学んだ道場では、一定のレベルをクリアするまでは、次のステップの練習に進む事は許されなかったという。

だが今は、月謝さえ払えば、強くしてくれるのが当然だ、とでも言わんばかりの勘違いをした人も居る。僕にでも分かる事だが、強くなるのも技術を身に付けるのも、結局は本人の努力と心掛け次第なのである。

ウチの道場がオープンして間もない頃、中学を卒業したばかりのヒョロヒョロとした高校生が入門してきた。顔付きも幼く、僕も最初は「大丈夫かなあ」と思ったような、格闘技とは縁遠い印象の子供だった。

しかし、彼は高校生時代の三年間、高校球児が甲子園を目指して毎日野球練習に明け暮れるように、いつも一心不乱に道場で練習し続けた。現場担当ではない僕が、たまに道場に顔を出した際にも、必ず練習する彼の姿を目にした。

練習だけでなく、道場の先輩のプロ選手が試合に出場する時にも、彼はセコンドの雑用を快く引き受け、リング下から熱心に試合を見守っていた。

ある時に関連の興業会社がウチの道場のリングを使用して記者会見を行うとの事で、早めに練習を切り上げさせた。シャワーや片づけの時間も考慮して、三十分程前に選手たちを促して退室させた。だが、高校生の彼はランニングマシンに乗ったままトレーニングを止めようとしな

「おいおい、あと三十分だから、シャワーして、片づけて」と僕が言うと、

「いえ、甘井さん、僕、時間一杯までこのマシンで走って、そして家までランニングして帰りますから、片づけ要らないんで続けさせてください。お願いします」

僕はこちらの都合で練習時間を短くせざるを得なかった事を申し訳なく感じた。

その後、彼はアマチュアのキックボクシングの大会で連戦連勝を続け、高校を卒業すると同時にプロデビューを飾った。道場では五人目のプロ選手だが、全く格闘経験の無いところからデビューしたのは彼が初めてだ。

「あいつはセンスあるよ」

と言っていたのは達人だった。

格闘技でも、こと打撃に関しては、「才能」という部分が大きなウエイトを占める。いわゆる『当て勘』という奴だ。

その風貌からは想像できない彼の非凡なセンスを達人は見抜いていたのだ。

プロデビュー戦を勝利で飾った彼の活躍を報告すると、

「まあ、その辺のクラスやったら、あいつは余裕やろう」

と、勝利を確信していたかのような返事が返ってきた。

ひところアントニオ猪木さんの仕掛けで「異種格闘技戦ブーム」というものがあつた。空手、柔道、ボクシング、プロレス、キックなどの猛者がジャンルの壁を超えて同ジャングで戦うというもので、この流れが現在の「総合格闘技」なるものに繋がっている。

そんな中で、柔道と柔術はどちらが強いのか、空手とキックボクシングはどちらが強いのか、などの競技としての強弱論などが大いに語られた時期がある。

これに関しても達人の意見は明快だった。

「ジャンル同士を比べても、何の意味もあらへん。全くナンセンスや。要はその選手が強いのか弱いかわて。強い奴やったら、別のジャンルで練習してもやっぱり強くなりよる」

至極、正論だと思う。

また、達人はこんな事も言った。

「強くなる奴は、寝ていても日々強くなる」

本当に「強くなること」への執着が強い人間は、夢の中でも格闘技に関して考え続けるから強くなるんだとの意味なのだが、それはそのまま達人自身を指しているようにも感じた。

ある日道場へ行くと、達人が自分の下駄を眺めながら唸っている。

その風体は極めて普通の達人ではあるのだが、履き物に関しては一本歯の下駄を愛用していた。散歩の時でも身体のバランス訓練になるからとの事だった。

僕が声を掛けると、達人は下駄を眺めたまま、「ちよつと、あまちゃん、これ見てくれるか？」と返してきた。

何の変哲もない（とは言っても高い一本歯の下駄だからやはり異様ではあるが）下駄の歯を見せられても、僕には何故達人が唸っているのか分からなかった。

「これがどうかしたんですか？」

僕が答えると達人は、

「いや、数ミリ、下駄の歯の減り方が左右で微妙に違うやろ。ちゆう事は、ワシの体幹のバランスが悪くなってるんや。ちよつとシヨックや」

と、その理由を明かしてくれた。

僕にとっては、その微妙な違いに悩む達人の姿が興味深く、ますます魅力を感じた。

格闘技経験のない僕にとつての道場でのポジションは「小舅こじゅうと」と言ったところだ。館長のノブ選手や達人などは、自分自身の行動で練習生たちに範を示せるが、何も持たない僕は、言葉で伝えるしかない。それでも会長や達人の「筋」や「道理」を大切にする生き方を目の当たりにし、同じようにそれに重きを置いて生きているとの自負があるから、間違つた事をしている練習生には、真つ先に僕が文句を付ける。

それにしても、大部分が達人の言葉をかみ砕いて喋っているのに過ぎない。

人間は成長するに付け、「ああ、昔よく怒られたのはこういう事だったのか」という「気が付き」の場面に出会す。それが少しでも早くに訪れれば、成長は早いものとなるだろう。

残念ながら、回り道ばかりしてきた僕は、そういつた気がきが遅かった。

だが、特に格闘技は若い内に成長しなければならぬ。

達人の言葉を若いうちに咀嚼出来れば、練習生たちはもつともつと強くなれると思う。

達人は相手が理解出来ないようだったら語るのを止めてしまう。

その分、通訳ではないけれど、達人の言葉の意味を、少しでも伝えたいと思い、小舅の口数は多くなってゆくのである。

達人と格闘技観戦している時は非常に楽しい。

ヒョードル選手の強さの理由を教えて貰った。

「あいつはジャブが綺麗やから、あのフックが活きるんや」

との事だった。

打撃中、最速のパンチ「ジャブ」。

最短距離で、まず打つパンチ。試合の起点となり、ペース作りにも欠かせない基本中の基本。先日の榎洋之対粟生隆寛のボクシングのダブルタイトルマッチでは榎の左ジャブを中心に十二ラウン

ドの攻防が一点に支配され、三人のジャッジが全てドロウという珍しい結果となった。それ程ジャブは試合の流れを左右する。

一見見落しがちだが、ヒョードルのジャブは基本に忠実で美しいフォームである。スピードのあるジャブを目で追わなくてはならないから、その視界外から飛んで来るロシアンフックを対戦相手はまともに喰らうのだ。

達人の解説は、どんな解説者よりも納得できる。

達人が特に褒めていた選手がピーター・アーツ選手だ。特に全盛期のアーツのハイキックは理想的な蹴りだったそうだ。我々一般の素人から見ると、ポーズもピシッと決まっているミルコ・クロコップ選手のハイキックの方が華麗に映る。どちらかと言えば相手をKOする時のアーツの蹴りは、相手の方に倒れ込むような感じだ。

「いや、そやからアーツは凄いや。ハイキックの場合は軸足があるやろ、それがアーツの場合、インパクトの瞬間に極端なときは三十センチ位前へ移動しとる。そやから相手に向かつて倒れこんどるように見えるけど、実はこれで当たった瞬間にアーツの全体重が蹴りに乗とるんや。そんな蹴りを喰らうたら、絶対に誰も立たれへん。一番凄いののは、その理想的な体重移動をアーツが無意識にやつとる所や」

アーツの強さの理由を、改めて知ることが出来た。

達人は酒を一切飲まない。もし酔った席で何かがあった場合、酔っている事を言い訳にするのを潔しとしないという信念からそうしているという。

僕は酒好きで、だらしなく酔っ払う方だから、トラブルに巻き込まれることもある。

酔っぱらい同士の喧嘩をなんとか仲裁しようとして、酷い目に遭ったことがある。自分自身も酔っていたし、変な正義感だけ強い僕だが、当然ながらそんな場を収めるような器量はない。その時に、酔った者が何を考えたのか、消火器をフルスイングで振り下ろそうとした。

「危ない！」

そう言うと同時に、達人は振り下ろされた消火器を目にも止まらぬ早業で振り払った。

まかり間違えば、僕が大怪我をしていたかも知れない。

達人に本当に助けられた。

「酔っぱらい同士は、もう理屈じゃないから、どんなに話しても仲裁は無理」

後日、達人はそう言って、僕の軽率な行動を諭してくれた。

あの時の達人の電光石火の動きは今でも目に焼き付いている。一瞬の判断で直ぐに動けること。達人が酒を飲まない理由の一端を知った。

武道家とはかく在るべし、という自身の理念を忠実に生きる達人。その考え方が、時代の流れと逆行するものであったとしても、僕はその生き方に敬意を表し続ける。勿論、格闘技の世界には沢

山の人が居て、色んな考え方を持ち、自分の信念に基づいて研鑽に励んでいる。どれが正解でどれが間違いと一義的に決め付けることは出来ない。

それでも、達人との出会いによつて、僕が格闘技を考える上での根幹は養われたように思う。

人間の趣味は移ろいやすいもので、一頃熱心に格闘技を見ていた人が、ふとした切っ掛けで会場から足が遠のき、全く興味を無くしてしまう。

僕も後援会からの惰性で格闘技に関わっていたら、自分が関係しない試合に対しては、そんな気分になっていただろう。

しかし、達人の言葉はいつも、僕の中にある事さえ気付かなかった新しい窓を開けてくれ、違った角度から格闘技を見ることを促してくれる。

ウチの道場には「達人」が居る。

これは本当に素晴らしいことなのである。

小舅の僕にとっては、本当にありがたいことである。

二〇〇八年四月六日

甘井もとゆき